

研究テーマ	響きあうベルギーと日本—ベルギーの音楽をめぐる学際的研究: F.-J.フェティスのオペラ・コミック《双子姉妹》	報告書作成者	大迫知佳子
研究従事者	大迫知佳子、友利修、新福美咲、島田樹里(声楽家デュオ jeux interdits)		
研究目的	<p>①研究目的</p> <p>ベルギーは、1830年の独立革命を経て国家独立を果たした。その際、ブリュッセルのモネ劇場で上演された歌劇《ポルティチの口のきけない娘 <i>La Muette de Portici</i>》上演が革命の一つの契機となったとされる。この時代からこんにちに至るまで、ベルギーにおいて、音楽は産業・政治・文学・美術等、幅広い分野に影響を与えている。しかし、日本の音楽界においては、近年まで、ベルギーの音楽にはほとんど焦点が当てられてこなかった。</p> <p>したがって、ベルギーの音楽を巡る研究を深化させるため、本採択テーマの母体である第4回「ベルギー学」シンポジウム「響きあうベルギーと日本—ベルギーの音楽をめぐる学際的研究—」が企画された。シンポジウムは、社会学・経済学・政治学・文学等、音楽以外の分野も含めた学際的なアプローチを通して、より広い視野に立ってベルギーと日本における音楽的交流を捉えることを目指すものであった。このアプローチの中で、独立以降のベルギー音楽界で大きな影響力を持ったベルギー人作曲家 F.-J.フェティスのオペラ=コミック《双子姉妹 <i>Les Sœurs jumelles</i>》に関する研究・上演を行う。この時、彼の音楽理論・音楽実践の両面に関する解明・考察を通して、ベルギーの音楽研究、ひいてはその日本への受容研究への架け橋となり、「ベルギー学」のさらなる発展をめざすことが、本研究の目的であった。</p> <p>②研究方法</p> <p>この目的を遂げるため、次の3つの段階を踏んで研究・演奏を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) オペラ・コミックの内容、上演状況、音楽分析から、当時のフランス語文化圏における舞台作品の社会的重要性の中でそれらがどのような意義を持ち得たのかを解明する。 2) 上記1)の解明を踏まえ、シンポジウムのパネルディスカッションにて研究成果を公表・議論する。 3) 上記2)を踏まえた演出の下、オペラ・コミックを上演する。 <p>1)～3)に沿って行った研究・演奏の成果は、様式9の2に詳細を記す。</p>		

研究内容	<p>③研究内容</p> <p>③-1. 母体となったシンポジウムの概要</p> <p>シンポジウムは、2023年12月15日(金)、16日(土)の2日間で開催された。15日はベルギー大使館にて、大使の温かいスピーチを賜り、ベルギーにゆかりの深いエリザベト音楽大学川野祐二学長の記念講演(「日白音楽交流—2人のベルギー人イエズス会士を中心に—」)が行われた。その後、ベルギーに留学経験のある若い音楽家を中心としたオープニング・コンサートにて、ベルギー人作曲家の作品が披露された。16日には、研究目的で述べた「学際性」を担保する2本の基調講演(ベルギーからの招聘研究者の講演を含む)、4本の研究発表、そして、パネルディスカッション、オペラ公演が行われた。なお、シンポジウムへの参加者は、関係者を含めて、2日間で延べ172名(実行委員会調べ)となった。</p> <p>③-2. 研究成果の概要</p> <p>《双子姉妹》の内容と当時の位置付けについては、資料調査・入手した印刷台本、手書き台本、文芸年鑑(<i>Annales de la littérature des arts</i> 等)、音楽雑誌(<i>La Revue musicale</i> 等)、出版総譜、ピアノ(またはハープ)伴奏付き声楽譜、ギター伴奏付き二重唱譜、そしてフェティスの理論書などによってその詳細を明らかにした。これらの資料と諸研究者の議論により、作品の成立状況・筋書きに加えて主に以下のことを解明・考察し、最後の演奏会へと繋げた。</p> <p>1) 受容の状況</p> <p>上記資料の分析により、本作品の再演回数が多いこと(『サウンド』記載の数字よりもさらに多いことが新たな資料から明らかとなった)、流行／替え歌歌集への掲載が複数見られること、1823年のヒット曲として主人公のロゼットとジュリアのクープレ等が取り上げられていること、ピアノやギターなどの伴奏付き声楽譜も出版されていること、19世紀当時だけでなく、フェティスの生誕百周年記念にもブリュッセルとモンスで本作品の五重奏曲が歌われたこと等が明らかになった。このことから、《双子姉妹》は、初演当時フランスにおいて「あたり」をとり、(替え歌歌集という、旋律を知っていることが前提の歌集に掲載されるほど)旋律が普及していた作品であり、また、ベルギーにおいても長きにわたり彼の最良の作品の一つとして記憶されていたことが窺えた。</p> <p>2) フェティスの音楽思想との関連</p> <p>フェティス著『万人のための音楽入門』の「クープレ」の項の記述には、当時の音楽事典に記載されている同語の定義をより</p>
------	--

研究内容

柔軟に解釈しうる可能性が読み取れた。一方《双子姉妹》の「クープレ」「デュオ」等に見られる各曲のジャンル名・編成にも多様性が見られた。このことから、理論書に見られるフェティスの理論的・歴史的視点が、作曲実践において意識的に応用されていることが窺えた。また、同書「デュオ」「エール」「カヴァティーナ」等の項の記述と《双子姉妹》の「デュオ」「エール」「カヴァティーナ」等の扱いからは、彼の理論・思想と実践が合致していたことも見てとれた。

3) 台本と総譜の構成上の相違

台本と総譜の比較により、第2場の二重唱、第8場のファビオのカヴァティーナ、第11場のジュリアとカルロのやりとりに改変や削除が行われていることが明らかとなった。これらの改変や削除は上演時間の関係によって行われたと推察できるが、その書き込みから、フェティスが台本作成にも積極的にかかわっていた可能性を指摘できた。

4) 双子の「Echo」

第7曲の双子の掛け合い(Echo)は、ハープ伴奏やギター伴奏が付された版も出版され、人気を博したことが窺える。この第7曲に含まれるスイスの山岳地帯の音楽イメージ、そしてエコーの効果の模倣は、19世紀前半のロマン主義音楽にとって極めて重要なトピクスで(Schuneider, Mathieu. 2016. *L'Utopie suisse dans la musique romantique*. Paris: Herman)、《双子姉妹》はその初期使用の例であることを指摘できた。

以上については、「作曲家、音楽史家としての F.-J. フェティス —オペラ=コミック《双子姉妹》、装置としての音楽史、そしてベルギー—」(友利修)において、成果の公表がなされた。

5) 作品とフェティスの「システム」の関係について

《双子姉妹》では、時代遅れになってしまった作曲家ラファエルという老オルガニストが双子の叔父として主要な登場人物となっている。このことを示すように、作品の音楽分析からは、16世紀末以降19世紀までに用いられてきた調性システム(「移行主音的システム」「複主音的システム」としてフェティスが示した理論を作品の主とすることが窺えた。特に、ラファエルが作曲した(時代遅れと見なされる)ロマンスは、当時のロマンスの語彙や詩型を踏襲しつつ、調性システムとしては16世紀末から18世紀までの「移行主音的システム」が用いられ、単純な調構成となっている。また、双子がラファエルと和解をするきっかけとなった上記 Echo についても同様であった。したがって、フェティスは、先述した先取性を見せる一方で、ロマン主義音楽の台頭の端境期にあった作曲家ラファエルを風刺しつつそれを調構成にも反映していたことが窺えた。

研究内容

6) 《双子姉妹》を中心としたフェティス作品の音楽の歴史と現在における意義

さらに、パネルディスカッション「F.-J.フェティスを読み、そして聴く—歴史・地理社会の点からもたらされる普遍への視野—」(ディスカッサント:友利修、安川智子、岩本和子、司会:大迫知佳子)において、次の議論を行った。まず、パリ音楽院で教鞭を取っていたフェティスが1830年代にブリュッセル王立音楽院の院長となってパリを離れたこと、この1830年代という時代はオペラ=コミックの演劇性(1830年代以前)からオペラの歌劇性(1830年代以降)への転換期であったことが指摘された。そして、オペラ=コミックというジャンルには元々その地域にしかわからないセリフとそのセリフの「おかしさ」があった点、《双子姉妹》のテキストは非常にフランス的であったが、王政復古の時代に、音楽の新旧論争を内容に含んだ同作品の「おかしさ」がなぜフランスで理解され、ヒット曲となり得たのだろうかという点、それは例えばイタリアを舞台にイタリア人の役をフランス人が演じ、フランス人を罵倒する場面などに風刺的な「おかしさ」が含まれていたのではないかという点、そしてその「おかしさ」は動作や音楽的な振る舞いによって表現し得た点が指摘・議論された。これらの議論と、上記2)・4)・5)に見られるフェティスの理論・思想・実践や先取性を踏まえ、「時代・言語・音楽等の様々な要素を俯瞰する場所としてのベルギー」という本作品の意義に繋がる図が浮かび上がった。このベルギーの作曲家フェティスだからこそその視点からの作品制作により、《双子姉妹》を中心としたフェティス作品が、当時のフランスとベルギーで重要な作品となり、ベルギーでは長年愛されたのではないか、という説が提示された。

7)《双子姉妹》の上演

最後に、これらの研究に基づき、特に双子姉妹を演じた新福美咲、三浦梓、そして本研究の協力者である島田樹里が衣装選択、時代考証、舞台演出、演技指導・助言を行った。さらに、上記5)の音楽分析結果を演奏解釈に反映させた。以上を踏まえ、本研究の最後の成果公表として、オペラ=コミック《双子姉妹》を上演した。

謝辞

このたびは、本研究に貴重な助成を賜り、本当にありがとうございました。冒頭に記載した通り、シンポジウムには多くの方にご参加頂きました。その中には、演奏会を目当てに参加した方も相当数含まれており、終演後には「フェティスのオペラ=コミックを聴ける機会は早々ないので聴けてよかった、素晴らしかった」「フェティスの別のオペラ・コミックをまたぜひ聴きたいので、続けて公演してほしい」などのお声を多くいただきました。また、ベルギー大使や、ベルギー王立図書館音楽部門長 Marie Cornaz さん等ベルギーの方々にも賞賛のお言葉をいただきました。あらためて時と場所を超えたフェティス作品の「普遍性」を実感するとともに、その日本受容という大切な歴史を貴財団の助成によって刻むことができましたこと、大変光栄に存じました。本公演は、貴財団の助成なしには成功し得ませんでした。心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。